

札幌大学総合論叢 第31号（2011年3月）

〈論文〉

留学生が抱える不安や問題とそのサポートについて — 札幌大学の留学生に対する質問紙調査とインタビュー報告 —

久野弓枝

はじめに

現在、日本で学ぶ留学生数は日本学生支援機構の調査によると、平成21年5月1日現在、132,720人（前年比7.2%増）で過去最高となっている。そのうち119,317人は私費による留学生である。2008年に「留学生30万人計画」が提唱され、計画の骨子にも「受け入れ環境づくり—安心して勉学に専念できる環境の取り組み」が挙げられている。少子化の影響で日本人学生を確保するのが難しい状況とも相まって留学生受け入れは今後、ますます加速するであろう。しかし今までの留学生受け入れに関する問題点が総括されないまま、留学生を増やすのは、問題があると考ええる。留学生受け入れを拡充する前に現状の問題点とサポート体制の課題を明らかにし、新たに必要なサポートとはどのようなものなのか、検討する必要がある。

昨今、筆者が勤務する札幌大学においても、留学生からの相談内容は「アカデミック・ジャパニーズ」に関する質問だけではなく、将来に対する不安、日本留学の意義、自分の存在価値に関する相談、心身の不安など様々である。そこで本稿では、筆者の勤務校であり私費留学生（1名は国費留学生）で多様な背景を持った留学生¹（交換留学生・留学生一般入試で選別された者、協定校からの転入生、大学院生、研究生など）を受け入れている札幌大学を対象に調査を行い、多くの私費留学生が感じている不案・問題を軽減するために何ができるかを探りたい。

¹ 2009年5月1日現在の留学生在籍数は学部・大学院留学生74名、研究生10名、交換留学生33名で計117名である。

1. 調査の概要

初めに留学生が感じている問題の概要を知るために質問紙調査を行った。さらに彼・彼女たちが留学生生活をどのように捉え、問題を解決してきたかを探るため学部の4年生のうち2名にインタビューを行った。

1-1. 質問紙調査について

調査目的：留学生が感じている問題と相談相手に関する概要を知る。また自由記述回答から、彼・彼女たちが必要としている支援について明らかにする。

調査方法：予備調査を行った後、日本語クラスの履修者や国際交流来室者に協力してもらい、実施した。

調査期間：2009年7月初旬から9月初旬

回収率：44名（57.1%）

調査協力者：

性別：男性17名（38.7%）、女性27名（61.4%）

国籍：中国37名（84%）、韓国5名（11.4%）、台湾1名（0.2%）、ネパール1名（0.2%）

学年：1年生8名（18.2%）、3年生16名（36.4%）、4年生9名（20.5%）、研究生2名（0.5%）、大学院生9名（20.5%）

質問項目：①あなたは今、不安や問題だと感じていることがありますか。

②不安や問題だと思っていることはどのようなことですか。（複数選択回答）

③相談できる人がいますか。

④誰に相談しますか。（複数選択回答）

⑤今後、大学にどのようなサポートがあったら、いいと思いますか。（自由記述）

1-2. 質問紙調査の結果と考察

調査結果の単純集計について報告する。まず、不安・問題の有無について聞き、その内容について複数回答可能として調査を行ったところ、表1のように7割以上が不安・問題を抱えていることが分かった。その内容は、表2で示したように、学年に関係なく第1に「経済問題」を挙げており、自由記述欄には「アルバイトが見つからない」、「勉強とアルバイトの両立が難しい」、「進学したいがお金がない」という回答があった。さらに「バイト代だけでは生活ができない」、「学費が払えない」という切実な回答も出てきている。景気の悪化の影響でアルバイト先では留学生を先に解雇する傾向があると聞いており、今後、さらに深刻な問題になると思われる。つぎに「経済問題」とほぼ同率で「就職問題」が挙

げられる。自由記述欄には「内定がもらえなくてストレスがたまる」、「面接に弱い」、「就職活動をして日本語力・日本理解力が弱いことに気がついた」、「母国と制度が違うので就職活動というものが分からない」、というように、就職活動を通して得た問題から「進路が分からない」といった漠然とした問題まで幅広く抱えていることが分かった。「勉強」について問題だと感じているのは大学院生が一番多く、40%強を占めた。自由記述欄には「修士論文の書き方が分からない」、「日本語が早く上手になりたい」という回答があった。さらに大学院生は「健康」についても問題だと感じている比率が他の学年よりも高い。大学院生は個々の専門領域の研究に入っていき、2年間という短い期間で結果を出さなければならぬため、様々な問題に直面していると感じているのではないだろうか。園田(2008)においても大学院留学生による相談が増えていると報告されており、大学院生が学部生と比較して問題を多く感じていること、学部から進学し大学生活に慣れたからといって問題が軽減するものではないことが明らかになった。

「友人」・「性格」を問題と感じている比率は低いですが、1年生の自由記述に「正直すぎて誤解されやすい」、「友達ができない」、「いつも恥ずかしいので人と話したくない」、「話が續かない」、「何を話したらいいのかわからない」という回答があり、1年生を対象とした日本語のクラスで「どのようなことを質問したら日本人に失礼なのか」という質問や「日本人が遠く感じる」という発言があったことから、日本語能力の他に心理的側面も大きく関与していることが分かる。また異文化（日本文化・社会）やコミュニケーション・スタイルの理解が不十分なため友人を作る際に不安を感じていると思われる。

表1 不安・問題

ある	ない	計
33	11	44
75.0%	25.0%	100%

表2 不安・問題

学年	経済	勉強	健康	性格	就職	友人	異性	性の問題	家庭	サークル
1年生	3	1	1	2	0	1		0	0	0
3年生	5	0	1	0	4	1	1	1	0	1
4年生	4	1	1	2	5	0	0	0	1	1
研究生	2	1	0	0	2	0	0	0	0	0
大学院	5	4	3	1	6	0	0	0	1	1
計	19	7	6	5	17	2	1	1	2	3
	30.2%	11.1%	9.5%	7.9%	27.0%	3.2%	1.6%	1.6%	3.2%	4.8%

つぎに相談相手の有無と相談相手について複数回答可能として調査を行ったところ、表3のように8割近くの留学生に相談相手がいることが分かった。そして「相談相手」として最も多かったのが「同国の留学生」、ついで「祖国の親・兄弟」で共に2割強であった。3番目に多かったのは「祖国の友人」で、同国の人に相談していることが分かる。特に1年生はその傾向が顕著に見られる。1年生の学生が春学期を振り返り「何がなんだか分らなかった」と述べていることから、情報が多すぎて対処できないまま過ごしていた状態が想像される。また「いない」と回答した者が1名で未回答も3名いた。研究生に関しては調査協力者が2名で、相談相手の有無について「未回答」1名、「いない」が1名であった。

「問題がある」と感じている留学生が7割以上いるにもかかわらず、大学内で日本人の相談相手を見つけることが困難な状況であることが分かった。「教員」が1割強で一番多く、ついで「国際交流センター」が1割弱で、共に低い割合であった。また「アルバイト先」が1割弱いたにもかかわらず「日本人学生」と回答した者は0%、「チューター」と回答した留学生も約0.5割にすぎず、学内において「日本人学生」と親密な関係を築くのが困難であったと考えられる。

表3 相談相手の有無

いる	いない	未回答	計
34	5	5	44
77.2%	11.4%	11.4%	100%

表4 相談相手

学年	学生 相談 室	医務 室	教員	国際 交流 セン ター	学生 支援 オフィ ス	同国 の留 学生	日本 人学 生	チュー ター	アル バイト 先の人	祖国 の親・ 兄弟	祖国 の友 人	その 他
1年生	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	3	0
3年生	0	0	3	4	2	8	0	2	3	9	6	1
4年生	0	1	4	2	0	6	0	2	2	6	3	1
研 究	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大学院	0	0	5	2	0	7	0	1	3	5	3	2
計	0	1	12	8	2	24	0	5	8	23	15	4
	0%	1.0%	11.8%	7.8%	2.0%	23.5%	0%	4.9%	7.8%	22.5%	14.7%	3.9%

2. 留学生へのインタビュー調査

単純集計だけでは詳細を知ることが困難なため、さらにインタビュー調査を行った。

2.1. 調査の概要

調査目的：入学時から卒業年次までにどのような不安・問題を感じ、どのように乗り越えたのかを明らかにする。

調査方法：半構造化インタビューを行い、1年時から4年時までの経験を日本語で語ってもらった。

調査日時：2010年1月20日 約2時間

調査を実施した場所：研究室

2.2. 調査協力者2名のプロフィールと留学生生活

調査協力者のプロフィールは以下のとおりである。

名前	性別	学年	出身地	学部	滞日期間
A	女性	4年生	中国	経営学部	約4年
B	女性	4年生	中国	経営学部	約6年

それぞれの来日の理由、大学生活、問題を感じた時のサポートを明らかにするために、インタビューの内容を学年時に沿って要約した。またそれぞれの学年時を一言で述べてもらい、学年ごとの特徴を明らかにすることを試みた。鉤括弧で示しているのは、調査協力者の言葉をそのまま引用したことを示している。調査協力者の経験に沿うことを第一目的としたため、調査協力者の発言をできるだけ使用し要約した。なお要約するにあたって調査協力者のプライバシー保護を優先した。

Aさん

「もっと上の仕事がしたい」

Aさんは2006年3月に札幌に来た。中国の大学の日本語学科を卒業し、日系企業の実習で生産管理部門に配属されたが、任される仕事が簡単な仕事だったため、もっと日本語を勉強し貿易の仕事がしたいと思った。札幌大学を選択したのは先輩がいたこと、学費の援助があったことが大きい。「貿易の仕事を絶対にしたかった」ので、経営学部を選んだ。

1 年生 「苦労」

Aさんは日本へ来たら親に頼らず「自立したい」という気持ちが強かったため、常に「プレッシャー」・「圧力」を感じていた。親には絶対頼りたくなかったため、「自分で何とかうまくやらなければならないという意味がすごくあった」。「冷静に色々なことに対応できない感じ」だった。勉強も大変だった。「授業を聞いてはいるが最初の半年ぐらいいは頭に残らなかった」。夏休みが終わって、秋ぐらいから、少しずつ分かるようになった。アルバイトを始めて、周りの日本人と付き合い始めたのが日本語の能力を上げる助けになっていると感じた。授業が終わったら、すぐアルバイトをした。体が弱かったため、精神的にもとても疲れた。一番困ったことは、勉強とアルバイトの両立ができなかったことだ。日本人の友達も作りたかったが、「気持ちに余裕がなかった」。このような状態で苦しい時が続いたが「大学のサポート」は大きかった。住宅補助金などの大学のサポートがなかったら、「どうやって乗り越えたか全く想像できない」。また困った時、日本語の先生や同国や他国の友人が相談に乗ってくれたことも大きなサポートになった。

2 年生 「自分がやるべきことを続ける」

2年生になって体調も良くなり、「アルバイトと勉強の両立にも慣れてきた」。「計画がちゃんとできてきた」ので、「心の余裕もできてきた」。1年生の時は日本の大学について何も分からなかったが、2年生になって「日本人との付き合い方、日本の大学の勉強の仕方に慣れた感じがした」。1年生の時は「我慢して無理やりやっていくしかなかった」が「2年生になって自分のことをいろんな環境に合わせて、自分なりにコントロールできるようになった」。アルバイト先を変えたことも大きかった。1年生のときは外国人が多いところ（中国人観光客が多い店）でアルバイトをしていたが、「このままでは全然だめだ」と思い、日本人向けのお店で働くことにした。そこは「日本人との接触」が多く、色々と学ぶ機会があった。「そんなに苦しいこともなくて、とにかく体が健康だった」ので、「他のこともやっていける」と思った。「授業も一杯取って、遊びに行ったり、旅行も少しできるようになった」。2年の後半にゼミを決めた。「やっと自分がやりたい勉強ができる」と感じた。

3 年生 「成長の時期」

余裕が出てきて、自分が好きな勉強ができて、アルバイトも少しずつ増やした。「気持ちと時間の余裕がすごく大切」で、何をやっても大丈夫だと感じた。今までにない自信が生まれた。

4年生「発見の時期」

4年生になって今までとはまた違う生活が始まった。就職活動で色々な所に行き、社会の厳しさを実感した。自分は絶対にできるという自信があったが、受けに行くたびに壁にぶつかった。自分の状況認識が甘かったと思った。試験を受けに行くと、日本人には当たり前にできること（履歴書の書き方、面接での話し方・姿勢・態度）が、自分にはできないこと、英語もできて優秀な人がたくさんいることに一時的にショックを感じた。しかし「自分に合う会社を探そう」と気持ちを切り替え就職活動を続けた。このとき彼女を助けてくれたのが「アジアブリッジのプログラム」（「札幌アジア・ブリッジ・プログラム」（札幌商工会議所））だった。プログラムに参加して「模擬面接」、「履歴書の書き方」などを習った。またカウンセラーが付いていたので、色々な悩みを相談できた。学生生活から「いきなり就職活動は難しい」ので、「どんな感じで話したらいいか、何を喋ればいいのか」、そんなプログラムが絶対必要だと思った。

〇〇会社から就職の内定をもらった。「早く仕事を覚えていつかチャンスがあれば、中国支社で自分が今までやりたかった経営をやってみたい」。

Bさん

「もっと日本語が上手になりたい」

2004年の4月に来日し、日本語学校で2年間勉強した。来日する前に、高等学校を卒業してから、〇〇学校という所で3年間、専門で日本語を勉強していた。日本に留学しようと思ったのは親戚の勧めもあったが、「もっと日本語を上手に話せるようになりたかった」からだ。日本語学校に在学中に大学進学を決めた。札幌大学を選んだのは、札幌が好きで先輩の勧めがあったからだ。経営学部を選んだのは両親が商売をしていて、自分も将来、「商売をしたい」と思ったからだ。

1年生「体調が悪い」

日本へ来るとき「親から自立したい」という気持ちが強かったため、生活費等の援助は何もなかった。そのため「勉強とアルバイト」ですごく苦勞した。大学に入学して日本の生活には慣れていたが、その疲れが出て「体が崩れてしまった」。風邪も引きやすくなり、胃腸の調子も悪く病院に通う日が続いた。体が一番つらい時期に、試験もあり、単位をかなり落としてしまった。「留学生の中で一番悪い」と思った。「すごくショックな時期だった」。このような時、「大学では特にサポートがなかった」。親しい友達や悩みを聞いてくれる先生もいなくて、頼れるのは「日本人の彼氏だけ」だった。

2年生 「勉強」

2年生の前半はまだ体調が悪かったが、後半になって「体のリズムが戻ってきたような」感じがした。体が良くなって「気持ち的にも楽になった」。「体と心はつながっている」と感じた。1年生で単位をたくさん落としてしまったため、「勉強に集中しよう」、「気合いを入れよう」と思った。2年生のとき履修した科目はほとんど落としていない。2年の後半になって、〇〇のゼミに入った。〇〇先生の授業に参加して「わくわくした」。だんだん大学にも慣れ、自信が持てるようになって、本州旅行もできるようになった。

3年生 「努力」

「今までで、一番、頑張った時期」だった。2年生の時より「勉強する意識が高まった」。自分の能力を人に認めてもらいたい、奨学金をもらいたいというのも理由であった。「私もやればできる」という気持ちが強くなった。それは友人（同国の友人）との出会いがきっかけだった。友人に「君も頑張ればできるよ」、「共に頑張ろう」という励ましをもらった。

大学祭では中心になって動いたがなかなか仲間をまとめることができなかった。しかし「物事をやる前には準備が大切」、「仕事の分配が大切」という「教訓」を得た。「失敗も成功の母」だと思った。

4年生 「大人になりました」

「この1年間は人生で一番変わった時期」だった。それは就職活動がきっかけであった。「外国で英語を勉強したい」という気持ちもあったが、就職活動を始めた。しかし自分が入りたいと思っていた「大企業」はすぐに落とされ「自分には（希望する会社に入る）能力が足りない」と分かった。それで「また外国に行って勉強しよう」と思ったが、「金銭面」や「両親のこと」を考え、諦めた。「日本に残るか」、「中国に帰るか」という選択肢が残った。「まだ勉強したい」、「どんな仕事が自分に向いているのか」悩んだ。壁にぶつかってようやくこの時期になって「自分に向き合った」。「1年前に何をしたいのか自分に考えさせていたら、もっと違う1年間だったかもしれない」と思った。「ちょっと遅かった」と思った。就職活動を通して、自分の気持ちと向き合い、「自分の両親のことを合わせて」考えられるようになった。ホテルでのアルバイトで結婚式やパーティーを見て母国で「ブライダルコーディネーター」の仕事に就きたいと考えるようになった。「自分も達成感を感じながら人を幸せにする仕事がしたい」と考えている。「自分が本当に楽しめる仕事が自分には本当に大切だ」。

2.3 インタビューに関する考察

二人のインタビューの要約をもとに共通点と差異を探ってみたい。まず入学前に「貿易の仕事がしたい」(Aさん)、「商売をしたい」(Bさん)という明確な理由を持って学部を選択している。二人とも「親から自立したい」という気持ちが強かった。しかし初年次では「苦労」(Aさん)、「体調が悪い」(Bさん)と述べているように「勉強とアルバイトの両立」に悩み、精神的に疲れ体調も崩しており、最も苦労した時期だと感じている。2年生になってからは二人とも体調が改善し精神的にも余裕ができ自分のペースで行動ができるようになった。2年生の後半にはゼミに参加し勉学にも集中し楽しみを感じている。3年次ではさらに気持ちの面で余裕ができ、自信を深め、「自分がすべきこと」、「自分がしたいこと」を見つけ出し実行している。二人は4年次を「発見の時期」(Aさん)、「人生で一番変わった時期」(Bさん)と位置づけている。就職活動におけるサポート体制は異なるが、二人とも進路について悩み就職活動における失敗で一時的にショックを受けながらも、自分に向き合い各々の将来像を描くことが可能になっている。

二人の不安・問題をまとめると以下のようなになる。



図1 二人が抱えた不安・問題

つぎに二人が持っているサポートについて考えてみる。二人のサポートの種類は異なるが、彼女たちは同国人だけではなく日本人のサポートも得ている。大学内においては「ゼミ」の存在が大きい。また校外においてもサポートが得られる状況は彼女たちの精神的安定にもつながっていると考えられる。Aさんが「アジアンブリッジがなかったら就職できていたかどうか分からない」と述べているように特にAさんの4年時における就職のサポートは大きい。一方Bさんは就職に関する特別なサポートがなかったと感じており「切羽詰まった状態で考えるしかなかった」。

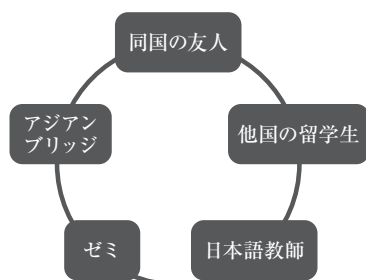


図2 Aさんが築いたサポート

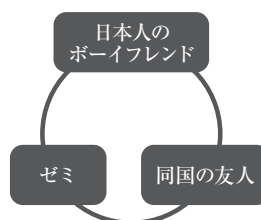


図3 Bさんが築いたサポート

3. 留学生の問題・不安を軽減するためのサポートに関する提案—留学生の動向と調査結果から

今回の調査をもとに今後、私たちに何ができるのか、考えてみたい。今回の質問紙調査から留学生は「経済」と「就職（進路）」に関して、問題（不安）を感じていることが分かった。またインタビュー調査からも「アルバイトと学業を両立するための経済的・精神的サポート」、「就職に関するサポート」の必要性が明らかになった。しかし留学生が問題を感じた時に相談するところ（人）が学内では非常に少ないことも判明した。

今後、本学において早急に必要だと思われるサポートとして第1に「異文化適応を考慮した継続的オリエンテーションの実施」、第2に「学外における交流プログラムの実施」、第3に「ピア・サポート」、第4に狭義の就職支援、日本語教育に留まらない「留学生を対象としたキャリアサポート」、第5に「留学生のための経済的サポート」が挙げられる。「留学生」を強調したのは2つの理由からである。第1に田口（2009）が述べているように留学生と日本人学生の間には、「キャリアに関する考え」、「年齢」、「価値観」などの「違い」があり、「ビザ」、「情報の不足」、「日本語能力」、「お金」、「時間」といった「格差」があるからである。第2に日本人学生と比べて家族や学内、地域のネットワークから離れている場合が多く、問題がなかなか表面にあらわれずアセスメントが可能な専門家につながるまでに時間がかかる場合があるからである（水野, p.79）。これらの理由により「留学生独自の支援体制」が必要なのである。

（1）異文化適応を考慮した継続的オリエンテーションの実施

繰り返しになるが留学生の「相談相手」は主に同国の人びとで、教員が1割強、国際交流センターが1割弱で共に低い。このことから問題（不安）が生じたとき日本人と十分な

コミュニケーションが取れていないことが分かる。日本人の相談相手の比率が低いということは情報量も少なく、日本人に対するイメージが抽象的であったり、否定的イメージを持ち続け孤立してしまう可能性も高い。筆者が担当する1年生の日本語クラスでは、「学生医療互助会」という制度に関する理解が不足していて、「お金がかかるから具合が悪くても病院に行かない」という学生が少なくなかった。また異文化で暮らすストレスはかなり大きい。孫(2009)が本学の留学生20人に実施した調査では、20人中17人(85%)が「大学に入ってストレスを感じた」と回答しており、その時の症状として「あまり寝られない」(8人, 36%), 「他人と接したくない」(7人, 33%), という症状が多かったと述べている。さらに、「ストレスを感じる原因」として一番多かったのが「日本の生活に慣れないから」(7人, 35%), ついで「日本語が下手」(6人, 30%)であったと報告している。これらの諸問題を軽減し留学生が持っている能力・経験が早く生かせるようにするためには一度だけではなく、彼・彼女たちの適応や状況に合わせたオリエンテーションが重要であると考え。留学生に対するオリエンテーションの重要性については、横田・白土(2004)、大橋(2008)によっても述べられている。

横田・白土(2004)はオリエンテーションの目的を3つ挙げている。第1に大学生活において当面必要な情報を提供すること、第2に留学生の抱える不安を軽減すること、第3に異文化適応のためのスキルを教えることが重要だとしている。そしてオリエンテーションの時期と内容を4つに分けている(pp.80-86)。また大橋(2008)はオリエンテーションのあり方について、知識や情報を与えるだけではなく、感情的および行動的局面が立体的に作用する異文化間コミュニケーションの訓練も重要であるとしている(p.93)。これらの先行研究を参考に本学におけるオリエンテーションについて考えてみたい。

表5 異文化適応を考慮した継続的オリエンテーション

オリエンテーションの種類	内容（事例の一部）
入学前のオリエンテーション	危機管理，不安の低減，先輩の体験談など
入学直後のオリエンテーション及び フォローアップオリエンテーション	履修登録，外国人登録，国民健康保険，奨学金， 住居に関する事など，最低限，大学生活で 必要な情報提供 心身に関する不安の相談 留学生に関係のある機関・スタッフの紹介と親睦会 チューター，学生サークル等の紹介と親睦会 大学・大学周辺の案内 異文化で暮らすために日常生活に必要なスキルの 訓練
適応を継続的にフォローする オリエンテーション (期間は学生に合わせて)	留学生が現実直面している課題の検討 異文化間コミュニケーションのワークショップ， グループ学習，シミュレーションなど自律的 学習を可能にするための振り返り学習 個別面談
帰国前オリエンテーション	リエントリー・カルチャーショックの予防 留学経験の振り返りと総括 個別面談

横田・白土（2004）と大橋（2008）を参考に作成。

本稿のインタビュー調査からも分かるように，留学生は苦勞や問題を抱えながらも，何らかの形で解決し，これらを糧として成長している。このことから留学生の成長の過程を見守り，援助が必要な時に彼・彼女たちが相談しやすい体制を作ることが大切である。また留学生が抱える不安・悩みは単独で存在するのではなく関連性（経済的問題・心身の不調・学業不振）が強いことが明らかのため総合的なサポートが必要である。

（2）学外交流プログラムの実施

「なかなか日本人の友人ができない」，「日本人と何を話していいのかわからない」という声を毎年，留学生から聞く。日本人との交流を深めるためには学内だけでなく学外の活動も考える必要がある。留学生は地域の住民でもあることを忘れてはいけない。学内で友人や相談相手が見つけれられない場合，年齢層，背景が多様な人びとが集まる「日本語教室」，「地域のサークルやボランティア団体」等との交流活動も彼・彼女たちのサポートとなると考える。またこのような実体験は自信につながり異文化適応を促進するきっかけとなり得るだろう。内容としては留学生を日本人家庭に招く「ホーム・スティ」，「ホーム・ビジット」，「茶話会」や留学生が発信する「料理教室」，「語学教室」といった活動が一例として挙げられる。留学生の日本語能力，性格，興味，日本・日本人に対する関心度は言うまでもなく非常に多様である。したがって交流プログラムを一律に決めるのではなく，大学関

係者、地域の担い手、留学生、日本人学生が互いに意見を出し合い実施することが望ましいと考える。

横田・白土（2004）、大橋（2008）・白土（2010）なども学外における交流事業は異文化理解を深めるだけではなく、留学生にとって社会的ネットワークを作るきっかけとなり、孤独や不安を軽減してくれるソーシャル・サポートを得る機会として重要であるとしている。

（３）ピア・サポートー学生による学生のためのサポート

教職員によるサポートだけではなく仲間、同輩によるサポート、つまりピア・サポートも重要である。気軽に足を運べる場所に留学生と対等に話せる人を配置し、留学生が危機的状況に陥らないよう予防的体制を整える必要がある。話を聞いてもらったり、先輩留学生に体験談やアドバイスを語ってもらうことは、安心感につながる。学業とアルバイトに追われる留学生にとって大切なのは気軽に足を運べる場所であり、仲間である。ピア・サポートの重要性については多くの人が述べている。たとえば大東（2009）は、ピア・サポートについて、留学生が危機的状況に陥らないための予防策として期待できる相談体制だと述べている（p.5）。園田（2008）も大学に慣れていない留学生のために入学直後からのピア・サポートの充実が必要だと述べている（p.5）。

『札幌大学学生相談室報告書 第22号』を見ると、留学生が抱えている不安・問題は日本人学生も同様な点が少なくない。このことから、金沢（2002）が述べているように留学生を異文化接触や外国人という視点からだけ見るのではなく、青年期の若者として捉える必要があることが分かる。春日井（2009）は、青年期は男女としての自己受容、親からの精神的・経済的自立、職業能力の形成と進路選択、市民としての政治能力や社会常識の獲得などが発達課題となる時期だと述べている。すなわち青年期の自己形成という視点から、共に成長していくために日本人学生によるサポートも重要であると言える。それではどのような内容が考えられるのであろうか。多文化共生を目指し、多様な活動を積極的に作り出している神田外国語大学の実践が参考になる。神田外国語大学では留学生別科と学部留学生に対して「新生活支援」「学習支援」「授業支援」でピア・サポートを実践している。次に表にしてその内容を紹介する。

表6 神田外国語大学におけるピア・サポート

新生活支援	
①バディ	新入生の手助けをする。学部生が留学生のバディになり、空港への出迎え、大学構内の案内、買い物などを手伝う。
②E-pal	メール交換を通して来日前の留学に対する心の準備、来日後相互理解を促すことを目指す。
③日本語パートナー	学部留学生と友人ネットワークを作る活動。
学習支援	
①チューター	留学生の話し相手と相談相手と位置付けている。会話パートナー、作文のチェックなどを行う。
②学習相談	必要な時に気軽に先輩学生に相談できるように学習面でのサポートを行う。論文・口頭発表などのネィティブチェックや助言、学習方法や文献の探し方などの相談にのる。
授業支援	
①留学生の自律学習支援チューター	学部1年生の日本語の授業に参加し留学生の自律学習支援を行う。
②クラスビジター	留学生が学ぶクラスに日本人学生がビジターとして参加する。

神田外国語大学ホームページ『留学生支援情報』pp.1-10と遠山千佳・徳永あかね・堀内みね子・村上律子(2005年3月)『外語大における多文化共生：留学生支援の実践研究』より。

神田外国語大学では入学後の日本人学生による「日本語サポート活動」,「チューター」などの日本語のサポートに留まらず,入学前,入学直後の心理面でのサポートも考慮している点が重要である。また「対等な人間関係の中で相互にかかわりを深められるような活動」を目標にしており,実践するだけではなく常にその検証も行われ,サポーターが危機に直面した際の対応も体系化されている。ピア活動のメンバー構成に関する詳細は述べられていないが,留学生と日本人学生という組み合わせだけではなく,新留学生と同国の先輩留学生と日本人学生などの組み合わせの工夫も必要である。

ピア・サポートは言うまでもなく単に学生だけに任せて良い活動ではない。大東(2009)はピア・サポートで拘われた事例が必要な際にリファーしうるセイフティーネットの構築が,成否の鍵になるとしている(p.5)。春日井(2009)はピア・サポート活動が継続・発展していくために必要な条件として次の7つを挙げている(p.13)。

- ①サポーターの善意に基づく主体的な活動であること。
- ②支援活動の目的、内容などを明確にして、共有していくこと。
- ③支援活動に必要な研修を受けて、目的に即したスキルを獲得していくこと。
- ④サポーターどうしの楽しい交流を通して、つながりや同僚性を形成していくこと。
- ⑤サポーターの自己評価や相互評価を共有しながら、葛藤し成長できる居場所を作っていくこと。
- ⑥援助の対象者からサポーターへのフィードバックを共有しながら、双方の成長を認め合える相互関係を作っていくこと。
- ⑦困難に遭遇したときの報告や相談先を明確にしていくこと。

(4) 留学生を対象としたキャリアサポート

「キャリア」・「キャリア支援」に関しては様々な概念があるが、ここでは上西（2007）が述べている「学生のキャリア形成を支援するために大学が（意識的に）行う教育活動および各種の支援活動」の意味で使用する（p.3）。またここでの「キャリア」という概念に関しても単に「職業キャリア」だけを指すのではなく、「ライフ・キャリア」という視点が必要であると考えられる。ここでのサポートの目的は留学生が学生生活を振り返り今後の自分のあり方を探求し、そのために必要な能力を養うことである。留学生のキャリア支援に関しては多くの研究がなされている。海外技術者研修協会（2010）・堀井（2008）ではビジネス日本語に焦点を当て、カリキュラムや実施する際の留意点が述べられている。海外技術者研修協会（2010）『日本ビジネス・ビジネス日本語研修 事例集』では「就職内定前」と「就職内定後」に分けたプログラムも紹介されており、多くの知見を与えてくれる。しかし「キャリア」という概念を中心に考えるとこの2つのコースだけでは必ずしも十分とは言えないのではないだろうか。一方、孫根（2008）・永井・徐（2009）・村田（2009）は留学生生活全般を捉えキャリアサポートの必要性を述べている。その中で永井・徐（2009）は近年、留学経験ではなく、海外での職務経験が重視されており、就職難に陥っている帰国後就職希望者に対するサポートが最も必要であるとしている。それは本学における2009年度の進路²からも明らかである。

上記の先行研究と本稿の調査結果を参考に4つのサポートを考えてみた。その概略を述べる。

² 留学生25人（学部・大学院生）の進路の内訳は「進学」が9人で一番多く、次いで「日本で就職」と「帰国して就職活動」が5人ずつである。ただし母国（中国）で就職が決まったのは2人しかいない（2010年3月10日現在）。

1) 就職内定前のコースのサポート

就職活動に必要な最低限の技能を訓練し自分自身で就職活動が進められるようにすることを目的とする。

- ①自己理解の促進（自己の価値観，職業観，ライフプランなどを考える）
- ②国内・母国・海外における就職に関する情報の提供
- ③就職活動に必要なスキルの指導（面接，エントリーシート・履歴書の書き方など）
- ④日本企業と母国の企業の違いについて知る
- ⑤留学生人材情報バンク（留学生の能力をビジネス・観光・教育・福祉・地域ボランティア等に活かすための無料マッチングサイトの運営）
- ⑥個別のカウンセリング（精神的サポート）

2) 大学院進学コースのサポート

大学院の情報収集，研究計画書作成などを通して，自己の能力を知り研究活動について検討できるようにすることを目的とする。

- ①自己理解の促進（研究の関心事，職業観，ライフプランなどを考える）
- ②大学院の選択や進学までに必要な手続き等に関する情報提供
- ③先輩留学生からの情報収集
- ④個別のカウンセリング（精神的サポート）

3) 就職内定後のコースのサポート

就職活動を振り返り自分が成長した部分，不足している能力について考える。また社会人1年目として必要な基礎的能力を養うことを目的とする。

- ①就職活動を振り返り自分の不足している能力，優れているところを考える。
- ②ビジネス日本語教育の実施（プレゼンテーションの仕方，敬語の復習などビジネス場面を想定した日本語教育）
- ③社会人1年目として必要な能力を知る

4) 進路が決まらない学生のためのサポート

今後，どのようなキャリア形成を目指すのか，計画できる力を身につけることを目的とする。

- ①自己理解の促進（自己の価値観、職業観、ライフプランなどを考える）
- ②国内・母国・海外における就職・進学に関する情報提供
- ③各留学生のニーズに合わせた個別の対応（精神的サポートなど）

（５）留学生のための経済的サポート

本学では2009年5月1日現在、下記のような経済サポートを実施し、留学生の54%が何らかの形で奨学金を得ている。

表7 札幌大学の留学生に対する経済的サポート

<ul style="list-style-type: none">・授業料の30%減免（交換留学生は除く）・住宅補助として年額30万円の支給・新入生学習奨励費（交換留学生は除く） （日本留学試験で360点以上（600点満点）以上のうち上位10人に対しては月額3万円、 日本留学試験で330点（600点満点）以上のうち上位8人に対して月額2万円を支給）・学生医療互助会費 年額3,500円の全額支給（交換留学生は除く）・札幌大学留学生奨学金（GPAに基づいて成績上位者に支給される） 2年生4人に対して月額3万円支給されている。・札幌大学私費外国人留学生緊急学習奨励費（北海道私費外国人留学生学習補助金の廃止にともなう緊急措置）2年生4人、3年生4人、4年生6人が月額3万円支給されている。
--

「国際交流センター」への聞き取りと2009年度の「留学生支援制度」を参考に作成。

このような経済的サポートが実施されているが、決して十分とは言えない状況であることが今回の調査で明らかになった。また北海道の経済状況の悪化でアルバイトを見つけるのも困難であると聞いている。十分とは言えないが次のようなサポートが考えられるのではないだろうか。

- ①留学生の学内における就業機会の増大（語学アシスタント、研究補助、購買部でのアルバイトなど）
- ②アルバイトの情報提供
- ③留学生を講師とする市民語学・文化教室の開催
- ④国内で就職した先輩留学生とのネットワーク構築

経済的サポートに関しては大学だけで解決できる問題ではなく、地域や公的機関との連携によるサポートが今後、ますます必要になる。平成 21 年 5 月現在、日本学生支援機構によると、学部正規課程において留学生総数の 80% 強が私立大学に在籍しており、私費留学生は留学生総数の約 90% を占めている。留学生 30 万人計画を打ち出している今、私費留学生に対する奨学金を増やし、住居の支援等が必要不可欠であるが、なかなか困難な状況である。佐賀県では国に頼るのではなく、大学関係者、市民が協力して「特定非営利活動法人 国際下宿屋」を設立し、留学生に低廉で良質な宿舎を提供したり、県の委託を受け留学生支援事業を実施している（木下, p.19）。そして経済的支援を「留学生交流」、「地域づくり」へとつなげている。このような NPO 活動も視野に入れて留学生の経済的サポートを考えていく必要がある。

4. おわりに

今回の調査を通して留学生が「経済面」・「進路決定」に関して強い不安・問題を抱えていることが明らかになった。またインタビュー調査から留学生は不安・問題を抱えながらも、日本語能力、専門知識を得ただけではなく、精神的にも大きな成長をしていることが分かった。その成長過程の詳しい分析は次回の課題としたいが、調査協力者たちが成長した要因を 2 つ挙げるができるのではないだろうか。第 1 に「自律した学習者」であったこと、第 2 に学内では得られないサポートを外部で見つけ重層的なネットワークを作ってきたことが挙げられるだろう。これらの調査結果をもとに 5 つのサポートを提案した。今後、さらなる議論が必要だが、第 1 に「異文化適応を考慮した継続的オリエンテーションの実施」、第 2 に「学外における交流プログラムの実施」、第 3 に「ピア・サポート」、第 4 に「留学生を対象としたキャリアサポート」、第 5 に「留学生のための経済的サポート」である。

国は「新成長戦略」において 2020 年を目途に質の高い留学生の受け入れ 30 万人を目指すとしている。そして入口から出口までの体系的な日本語教育プログラムの提供と総合的な教育環境の整備の必要性があるとしている（文部科学省 留学生の日本語教育に関する懇談会（2010）「留学生の日本語教育に関する懇談会」取りまとめ, p.1）。しかし現状を把握しないまま、留学生の受け入れを拡大するというのは留学生の満足度もあがらず、大学にとっても重大な問題となりかねない。現在求められているサポートは永井・徐（2009）が述べているように「留学経験」としてのサポートではなく、日本での「職業経験」を踏まえたサポートである。このようなサポート体制を充実させていくためには、言うまでも

なく人的・経済的サポートの拡充が必要であり、今後、どのような体制を作っていくのか、十分検討する必要がある。

留学生が自己を成長させていくためには、信頼できる居場所が必要である。そのためには、先輩、日本人学生、教職員、地域の住民等々の重層的なネットワークを留学生が作れるよう、サポートしていくことも重要である。

先に紹介した佐賀県の「国際下宿屋」の理事である木下は「地方都市だからこそできる国際交流」、「人々の知恵や人と人とのつながり」に意義があると述べている。日々、留学生に接する者として、一人でも多くの留学生から「日本に留学して良かった」という声が聞けるよう、彼・彼女たちの声に耳を傾け、国内・外の先駆的なサポート体制を検討していきたいと思う。

引用文献・資料

- 上西充子（2007）「大学におけるキャリア支援：その背景」『大学のキャリア支援—実践事例と省察—』経営書院 p.3
- 大橋敏子（2008）『外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入』京都大学学術出版会 p.93
- 海外技術者研修協会（2010）『平成 21 年度 経済産業省委託事業アジア人材資金構想共通カリキュラム マネージメントセンター事業 日本ビジネス・ビジネス日本語研修事例集』<http://www.aotos.or.jp> 2010 年 9 月 29 日アクセス
- 春日井敏之（2009）「大学におけるピア・サポート活動—新入生支援、インターンシップ、授業の試み」『現代のエスプリ ピア・サポート』502 号 5 月号 pp.130-139
- 神田外国語大学ホームページ『留学生支援情報』pp1-10 <http://www.kuis.ac.jp> 2010 年 10 月 29 日アクセス
- 金沢吉展（2002）「日本文化への適応と援助—異文化接触の心理学」海保博之・柏崎秀子編著『日本語教育のための心理学』pp.43-57
- 木下和弘（2010）「特定非営利活動法人 国際下宿屋」の取り組み『留学交流』Vol.22. No.4 時評社 pp.18-21
- 札幌大学相談室（2007）「悩みごと関連事項」『札幌大学 学生相談室報告書』第 22 号 pp.74-84
- 札幌大学国際交流センター（2009）『Sapporo University 2010』「留学生支援制度」p.10
- 白土悟（2010）「大学における留学生支援体制の再考」『留学交流』Vol.22. No.4 時評社 pp.2-5
- 孫根志華（2008）「城西国際大学の留学生支援体制（特集 留学生の生活支援）」『留学交流』20（4）日本国際教育協会編集 pp.14-17
- 園田智子（2008）「留学生相談の特徴に関する一考察—群馬大学留学生センターにおける留学生相談から—」『群馬大学留学生センター論集 第 7 号』pp.1-9

- 孫 穎 (2009)「留学生のストレスについて」『2009 年度 札幌大学 留学生レポート集』
- 田口香織 (2009)「留学生に対する就職支援の現状と課題 (特集 これからの留学生支援策を考える)」『大學時報』58 (329) 日本私立大學連盟 pp.60-65
- 大東祥孝 (2009)「留学生相談の基軸」『留学交流』 Vol.21. No.4 時評社 pp.2-5
- 遠山千佳・徳永あかね・堀内みね子・村上律子 (2005)『外語大における多文化共生：留学生支援の実践研究』異文化コミュニケーション, <http://www.kuis.ac.jp> 2010 年 10 月 29 日アクセス
- 永井隆雄・徐亜文 (2009)「提言 中国人留学生の就職とキャリア支援の必要性」『キャリアデザイン研究』 Vol.5 pp.159-167 日本キャリアデザイン学会
- 日本学生支援機構 (2009)『平成 21 年度私費外国人留学生生活実態調査概要』「はじめに」<http://www.jasso.go.jp> 2010 年 10 月 8 日アクセス
- 堀井恵子 (2008)「留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育に求められるものは何か」『武蔵野大学文学部紀要』第 9 号 pp.1-9
- 水野治久 (2007)「留学生へのカウンセリング活動」『つなぎ育てるカウンセリング』 pp.73-97
- 村田勝 (2009)「経済危機に対応した留学生後援会の設立—別府大学における留学生支援の取組 (特集 留学生の生活支援)」『留学交流』21 (9) 日本国際教育協会編集 pp.6-9
- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省 (2008)「留学生 30 万人計画」骨子 <http://www.kantei.go.jp> 2010 年 10 月 8 日アクセス
- 文部科学省 留学生の日本語教育に関する懇談会 (2010)「留学生の日本語教育に関する懇談会」取りまとめ p.1 <http://www.mext.go.jp> 2010 年 10 月 1 日アクセス
- 横田雅弘・白土悟 (2004)『留学生アドバイザー 学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版 pp.80-86

その他

札幌大学平成 21 年度卒業生進路
札幌大学平成 21 年度在籍留学生数

謝辞

お忙しい業務の中、調査に協力いただいた国際交流センターの職員の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。